

半田の都市再生 ～歴史力の蓄積と市民力の発揮～

井澤 知 旦

どんな都市にも、住民が誇りうるまちづくり資源が豊富にあるはず。しかし、なかなかうまく掘り起こせず、また組み合わせることが出来ずにいます。その点で愛知県半田市の取り組みは参考になります。

半田市は11万人強の都市ですが、31台の絢爛な山車を支えるだけの地域の力があります。歴史的に蓄積された産業資源が豊富で文化資源もあります。でも、あるだけでは不十分です。それを保存し、活用し、さらには復元していく市民力が必要です。それが半田にはあります。

都市再生にはもちろん山あり谷ありでしょうが、着々と進めている半田の姿がそこにあります。

半田(愛知県)といえは……

「半田とはどんなところ？」聞かれて、皆さんは何を思い浮かべるのでしょうか。「京都検定」に就いて半田検定の試験があるなら、「はて？」と思いがたれる節がない人は落第。「山車のある街だ」「蔵のある街だ」という人は平均点。「二百年の歴史を持つミツカンの本社のある街だ」「童話『こんぎつね』で有名な新美南吉の街だ」と思う人がいれば及第点でしょうか。「五大ビールメーカーの一つだったカプトビールの赤レンガ建物のある街だ」「黒沢明監督による『姿三四郎』の撮影所に使われた街だ」と得意げに語る人は半田通です。

半田市(人口十二万人、面積四十七km²)は知多半島にあって、これまで政治・経済・文化の中心を担ってきました。江戸期に酒・酢や綿織物が海運によって江戸・大坂に運ばれていました。明治以降、産業の近代化が進みますが、戦後、繊維産業が衰退し、臨海部で工業が立地していきま。醸造業の多くは衰退するものの、世界的な展開を図っている企業もあります。中部国際空港が常滑沖にできて、新たな飛躍が求められています。

半田の豊かな地域資源

地域の産業の発展は富の蓄積もすすめていきます。その蓄積が江戸期から今日まで山車を支えてきました。地域組織(組)がしっかりと活動しています。

醸造産業は企業アイデンティティの継承とPRのため、企業博物館(博物館群の里や酒の文化館)が運営され、醸造の一つであるビール工場も赤レンガ建物として現存しています。半田運河沿いの醸造蔵が連なる風景は観光資源の一つになっています。それだけではありません。歴史の保存・活用だけでなく、今日の食酢の寿司の元となる「尾州早ずし」や「カプトビール」の復元まで行っています。山車や産業資源以外にも新美南吉とい文化資源もここにはあります。

半田と都市再生

これらの地域資源をいかに地域発展につなげていくか。平成十六年度に全国都市再生モデル調査に取り組みました。実施にあたり、(社)愛知建築士会半田支部が中心となって個別の目的を持って活動している市民団体や業界団体、行政等による「半田蔵のまち協議会」を立ち上げました。半田の特徴はまさに実行力のある市民団体が数多くあることです。福祉から、防災、施設の保存活用、まちづくり、観光、教育、大衆演芸まで多種多様な、マンパワーのレベルが高いのです。テーマは次の三つに絞りました。半田市が平成八年に購入したものの財政難から改修できない状況下にある半田赤レンガ建物(旧カプトビール工場)を民間資金の導入を含めいかに有効活用していくのか、企業博物館と既存の歴史を持つ重厚な建築物群を結ぶ小路「下町通り」の環境整備をいかに図るか、半田赤レンガ建物と紺屋海道「下町通り」の回遊性をいかに高めるか、です。生活の質向上と集客交流の両立がテーマです。

最近の都市再生への取り組み

平成十七年九月十日に「赤煉瓦ネットワーク二〇〇五半田大会」が開催されました。各地の取組み経験の交流はもちろんです。赤レンガ事業を推進するためには市民の力なしではできないので、半田にある十二の市民団体が日頃の活動を発表したことは特筆すべきでしょう。昨年末には半田ライオンズクラブによって、赤レンガ建物の雑草が茂っていた南敷地をレンガ舗装と記念樹、ベンチの設置がなされ、憩いのスポットが生まれました。行政の縦割りを廃し、市民力を強化するため、素敵なまちづくりにむけた各団体のプラットフォームとなる「半田まちづくりコンソーシアム」を昨年度の調査で提案しましたが、いよいよ新年早々立ち上がる予定です。正に蓄積された歴史力と市民力の発揮により都市再生が進められつつあります。

主要な地域資源一覧

施設名	施設内容
半田赤レンガ建物 *旧カプトビール工場 (半田市所有)	中笠商店四代目 中笠又左衛門と敷島製パン創業者 盛田善平等が明治22年にビール製造を開始。その後、事業拡張のため明治31年に建設された工場。明治建築界の三巨頭の一人である妻木頼黄による、初期ビール工場の姿を今日に伝える遺構。赤煉瓦倶楽部・半田がイベント等で活用。国の登録有形文化財
博物館群の里 (ミツカン)	粕酢誕生の地である半田に開かれた、日本唯一のお酢の総合博物館です。昔を偲ばせるたたずまいの中で、倉人たちがつくりあげてきたお酢づくりの精神と技術、そして健康的な暮らしに役立つお酢に関する情報を様々な形で紹介
酒の文化館 (中笠酒造)	「日本酒」の知識と理解を深める施設(1986年オープン)。重厚な黒塗りの壁、格子の填った白い漆喰窓をもつ建物は、1972年まで約200年にわたって実際に酒造りが行われた酒蔵をそのまま生かしたもので、この建物自体が東海地方の酒造史の語り部
新美南吉関連施設	「こんぎつね」で有名な童話作家新美南吉の関連施設として新美南吉記念館や同生家・養家がある。
TS CAFE	「旧中笠家住宅」(国指定重要文化財)を活用した、2001年(平成13年)9月に開店した「紅茶専門の喫茶店」
小栗家住宅	小栗家住宅は、江戸時代以来、醸造業の盛んな知多半島の半田にあって、万三商店という屋号で醸造業に加えて肥料・米穀・綿糸も商う、この地方屈指の豪商の邸宅。古いものは130年以上を経過。現在も住宅として使用、原則として非公開。国の登録有形文化財
中笠半六邸	中笠半六邸は江戸時代から海運業と醸造業で栄えた半田有数の豪商。その邸宅は敷地規模1,000坪、家屋床面積は300坪に及ぶ。市民の手(半六倶楽部)による修復とイベントの開催を積極的に展開。半田市内屈指の料亭の一つ。ここは『姿三四郎』撮影当時、黒澤明監督率いるロケ隊が風食をとった場所。それにちなんだイベントや「末廣奇席」等の大衆芸、雑祭りなどのイベントに積極的に参画。
春扇楼末廣	江戸期にはミツカン、中笠酒造などがこの地で創業している。現在でも、半田運河沿いには多くの工場・倉庫からなる「蔵のまち」の街並みが形成されている。
半田運河周辺	江戸時代、半田港が開かれるまでの間、大野港と下半田を結ぶ交通の要衝であった。現在では、お寺やお社などが点在し、昔ながらの街並みが残る静かな通りとなっている。また、日本料理屋、せんべい屋など、「食」に関する観光資源も立地している。紺屋海道研究会が「ゆかた de 紺屋海道」イベントを実施
紺屋海道	JR武豊線半田駅にある半田駅前商店街振興組合は、料亭の春扇楼末廣や和菓子の老舗松華堂といった資源があり、「蔵しっくたうん」をキャッチフレーズに活性化を図ろうとしている。
蔵しっくたうん	1750年前後から天正年代にかけて、建造・再造・売却等され、現在31台のからくり山車が残存。人口11万人強の都市でこれだけの山車を保有し・管理・運営できることは、過去は裕福な土地柄であり、また地域組織(組)がしっかりと活動していることを表している。
その他	

